
パラレルワールドで超能力

ブラックフィクション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレルワールドで超能力

【Nコード】

N1637J

【作者名】

ブラックフィクション

【あらすじ】

中学3年の小倉栄太は、
なんとパラレルワールドへ
しかも友達などには俺との以前の記憶があるってうえに
皆固有の超能力を持ってるってきたもんだ
しかも俺にも超能力ができるようになるという
どうなるんだろ俺！
元の世界もどれるのかな？

何なのいきなり!! (前書き)

こんにちは、

ブラックフィクションです

今回は、初ファンタジーと言うことで中々うまくかけませんが感想 評価していただくと幸いです

冬休みはなるべく毎日更新しますので
よろしく願います。

何なのいきなり!!

「寝すぎた」

今何時だ？ 時計は壊したんだった

今日土曜日だよな、

昨日テストだったし、

昨日のテストぜんぜんできなかったな

なんて考えていると

「ぐぎゅるるるる」

・・・

腹減った、

布団から俺は這い出る

机の上においてあるメガネケースからめがねを取る

「食べ物」

とキッチンに向かう

あれなんかいつもと違う感じがする

電話だ家電話がないなぜだ？

まてよケータイは？

普通にあったよポケットに

てか家電話がなくなるって何があった？

「泥棒？」

自分の言ったことを首を振って自分で否定する、

「ないよな」

家電話なんか取らんよな、
まいいやそれ置いとこ

「時間！」

と思い出したとともに部屋に飾ってある時計を見る

13・00

「なんで！ 寝すぎだよ」

自分でかなり驚くしかしすぐに元に戻り

「洗濯物取り込まないと」

そうして靴を履き外に出る、

しかし洗濯物は干してなく目の前に広い道路が広がっている

昨日取り込んだっけ？

あれ？

・・・・・・・・

俺、小倉栄太こぐれえいたは、

今までの人生の中でびっくりしたことがあったと言えば

テストで88点取った時ぐらいかな

俺は髪は黒髪でいつも寝癖ばっか

目はもちろん黒

今中学3年しかし頭は良くない 社会以外

高校はそこらへんの馬鹿高でよいと思っている

ついでにメガネかけてる

顔は普通かな？

こんなノーマルの人生そんな
俺にこんなびっくりする日が来るとは

「何ですかこれは~~~~~」

そんな栄太は目の前の光景が信じられなかった
少学3年くらいの子がスケボーで宙に浮き
スケボーの後ろから水噴射をだして
そこらへんを行ったりきたりしている
しかも地面についた水はすぐに消えてなくなる

何これ？

夢かな？

とりあえず自分の頬を

つねる

つねる

つねる

痛かったただだった

・・・

もう一度言っとく

「何これ~~~~~」

何なのいきなり!! (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

こんな作品になっておりますが、

少しずつ精度をあげて生きたいと思います。

2話もよろしく願います。

ではまたいつかの後書きで、失礼します。

少年にいじめられたことある？

今俺は隣の家に来ている

隣には同じ年の幼馴染と言うものがすんでるから

この状況を奪回するために

わざわざこいつの家にやってきたのだ

そして今俺の目の前にいる少女が

「で、何のよう？」

と発言

茶髪で身長が俺より低い

にちわたちみ

日和立見

性格が悪い女子だ

「さっき空飛ぶスケボー見たんだけど」

こいつの目が変わる

そして俺の頭をなでて

「頭大丈夫？病院行く？」

「本当だって！」

思わず声を荒げてしまう

全く、と言って俺はさっき出された

コーヒーを口に持っていく

すると

「分かってるで、どうせその子 風系と水系じゃないの」

何の事がまったく分からん
何風系 水系って何、今流行ってんの？

「マジで病院行く？」

「まあいいや、そういう結局超能力なんだろうね？」

「超能力って何？」

8

・・・・・・・・・・

空白長って

・ばっかじゃん

息つまっちゃうよ

てか立見かなり引いてるし

何かした俺？

質問しただけじゃん

悲しいよ俺

もう立ち直れん

「病院行こうか、脳外科にね」

すごい笑顔で返ってきたけど

笑顔怖いなくてか

脳外科って頭イカレタわけじゃないんだけど

なんかいたら凄いことになりそうだから

家を出よう

うん決定

「じゃあ俺もう帰っから」

といって家を出ようとすると、

「ちよつとまてや〜」

やば怖いつて

このオーラだけで戦車壊れるんじゃないの

あ！やわら〇戦車じゃないよ

とりあえず逃げるかな、

「じゃまた」

「頭おかしいやつをうろつかせるか」

と言って追ってきそうだったが、
パジャマだったので外にはこないらしい

結構走った後にどうしようか迷う

とりあえず今までの情報をまとめると

昨日までまともだった人たちが超能力を得た事
かな

まてよあの少年が最近発売された最新のメカで
頭がおかしいのが立見だとすると

俺が正常なんだよな、

うんそうに違いない

よしと思い前を見ると、

何か電気を操る少年とそれを受け流す少年のケンカをしている

薬なんってやったことないぞ俺

こうゆうオカルトじみたことは

しゅうた
秀太に聞いたほうがいいよな

「よし秀太の家に行こう！！そして超能力の事聞かないと」

と大声で叫ぶと

ケンカしていた少年がこっちみて

「あのおにいちちゃん超能力分かんないんだって頭大丈夫かな」
「わかんない」

うん

仲直りしてよかった、

なんか

目から流れてるけどもうしらね
とつとと秀太家にいこう

「バカヤロー」

と言って走ってった

少年たちの顔がどうなったのかは
言うまでもない。

こっちの世界では俺雑魚だって〈笑〉

秀太の家の前

「ピンポーン」

「・・・」

「ピンポーン」

「・・・」

「ピンポーン」

「はい、誰っすか」

「栄太だよ」

「入るっす」

1回で出ろよ！

玄関を開けてはいる

靴は脱がずに奥に行く

そしたら地下に行く階段があり
地下に行く

降りきったところで

扉があるためあけてはいる

部屋にいたこいつは

なかつしゅうた
仲田秀太

髪が黒色で

真っ白の服を着ている

腕には常に赤色のリングを

右手に3個

左手に1個

はめている

同級生で

頭が良い

部屋はかなり散らかっている

実際にはここは

秀太の部屋ではないのだが

こっちの研究室ぽいところが

落ち着くらしい

『ちなみにこいつの部屋は二階』

「珍しいすっね栄太から来るなんて」

「色々あってさ、しかもちよっとオカルト」

「ほう、それは聞かないとだめっすね」

とパソコンに向かっていた秀太がこっちを向く

「実は」

「うん」

「なんと」

「おお」

「皆超能力使えるようになってんだよ」

これ前も無かったか？

やっぱあつたよね！

集団催眠ですか

みんな催眠状態？

と何か考えるそぶりを見せ

ゆつくりこつちを見る

さすがオカルト

いきなりどうゆう事になっての

違う世界って何

パラレルワールドって事ですか！

ないない

「パラレルワールドすっね！」

本気だった~~~~~

しかも何で断定しちゃうの

何の確信があって

「何で分かるんだよパラレルワールドって」

「あゝそうっすねそっちじゃ、ないみたいっすね」

「何が」

「超能力っす」

「無いよ」

「まゝとりあえずすべて説明してきまっすけど」

「はいはい」

えゝととりあえず今説明されたことをまとめると

この世界では生まれたときからある

吊電^{ちやうでん}ってのに

性質があるらしく

それによって使える能力が違うらしい

嘘くせ~~~~~

本当ないって

いきなりそんなこと言われて信じられるか

無理不可能

あははははは

「ちなみに私はメモリージャックっすよ」

「メモリージャック？」

「まゝ簡単に言う記憶侵入っすね」

「へ？」

「さっき栄太の見たっすからだから

この世界の人間じゃないってわかったんすよ

たぶんこっちの栄太と

そっちの栄太が入れ替わったんすね」

「個人情報保護法って知ってる？」

「仕方ないじゃないっすか！緊急事態でしょ」

記憶見られたって

記憶見られたって

記憶見られたって

記憶見られたって

記憶見られたって

「ああ！それとこっちの栄太とそっちの栄太じゃ少し記憶違うすっから」

「そりゃそうでしょ」

「こっちじゃ栄太はまだ超能力何か分かってないんすよ」

そうですか何か頭痛いよ

なんかどうでも良くなつて来た
超能力使えたら良いね、

「何か調べるのに15年かかるらしいすから」

誕生日過ぎたけど

もう15歳だけど

どうなの

「もう15歳だけど」

「明日、明後日ぐらいって言ってましたよ栄太が」

「あそう、とりあえずいったん家かえるわ」

「気をつけるっすよ、今の栄太は少年にも負ける雑魚すから」

何も言わず階段をあがってく栄太

外に出て頭の中が真っ白になっていた。

「やばくないこの世界！」

カプセル飲む時ってやっぱ水？

日曜日

昨日家に帰った後俺は最後の希望にかけて寝た
もしかして寝たら元に戻るかもってね
うんで今日起きてすぐ外に出たらいよいよ昨日のスケボー少年

「戻れないよな、まあいいか」

俺はポストに手を伸ばす

昨日言われた手紙が来てるかもしれないから
やけに硬いポストのふたを開けると
今日届いたらしい新品の封筒が入っていた

「政府より」

と書かれていた

それを持って家の中に入る

そのままテーブルに向かいながらメガネケースを取る
椅子に座って封筒を置いてメガネをかける

「さてどんな結果なのかな？」

実のことを言う俺はこの世界に来て

もちろん最初は怖くなったり、気味が悪かったけど
友達もいるし

なんとなくだけど俺の状況理解してくれるから

今はちょっと好奇心のほうが強くなっていた

「つか、あっちの世界の俺が超能力使えるのかな？」

とりあえず、と俺はちよつとふるえる手を抑えつつ封を破く

そしたら中には黄色と水色で装飾された

手紙があり

それを開いて読むと一番上に

「診断結果」

と書かれていた

それから他の文字などは軽く無視して読んでいくと
最後に俺が知りたいことが書いてあった

「あなたの超能力は、ねじ曲げる…3 です」

「へ？」

なんて間抜けな声を出してしまったのだろうか
ねじ曲げるって詳しくはどんな感じにするんだるうか
てか、どうやって使うの？

3ってレア度？

しかしため息をついて

「秀太に頼るしかないよな」
となる

そのため俺は手紙を置いて着替える
そして、手紙をポッケにつっこんで外に出る

「さて行くか」

秀太家の前

「ピンポーン」

「・・・」

「ピンポーン」

「・・・」

「ピンポーン」

「だれすっか」

「栄太」

「2階っす」

「OK」

一回で出ろよ

前とは違い家に入ったたら靴を脱ぐ
そのまま階段を上っていくと
扉が3つあり一番手前の扉を開ける
そしたら秀太が

自作ゲーム機を作っていた

「今日はどうしたんすか？」

「手紙が届いたからきたんだけど」

座る場所が無くとりあえず左右に色々な部品をどける

「きたんすつか、うんで何だったんすか」

「何が？」

「超能力に決まってるすよ」

ああと言いながら手紙をポッケから出す

「曲げる？ 3つて書いてある」

「リアル系すっね」

「リアル系？」

秀太は自作ゲーム機を作るのをやめてこっちを向く

「人間が実際にできる事を強くした能力のことっす」

「他にあるの？」

後はと言って秀太が立ち上がると

机の上のノートパソコンに手を伸ばす

「これだけあるっす」

そう言ってノートパソコンをこっちにみせる
そこには

想像系 火 水 電気 など
遺伝系 動物などの力を使う
ノンリアル系 現実ではありえないこと
などが一般的

「へー 勉強になります」
「こっちの常識だから覚えておくっす」

ノートパソコンを俺の前から引っ込めると

「で、超能力ってどう使うの？」
「テنز波全身にあびせるっす」
「テنز派？」
「説明しても理解できないですよ」
「じゃあいいや」

と食い下がる

「でそれあびたら使えるようになるの？」
「そうっす」
「どこにあるのテنز波は？」
「一般家庭には普通無いっすよ」
「マジで」
「一般家庭はすっけど」

と言って笑い出す
怖い

「つまり持ってる」と
「何でわかったんすか」

いやそれは

「まあいいす、簡単な奴でいいすよね」

「簡単？」

すると秀太が隣のタンスから変なカプセルを出す
しかもそれが異様にちっちゃい

「これ飲むっす」

「何？」

「この中にテنز波がはいってるす」

「入ってて？」

「つまり内側からテنز波を浴びるって事っすよ」

ふうんと言って俺がカプセルを受け取ると用意していたのか
水も渡してくる

「半日もすれば効果が出るっす」

了解、と言ってカプセルを口に含み水で一気に流し込む
そしたら秀太が

「すばらしい力に期待をするっすね」

と不適な笑みを俺に向けていた。

曲げちゃえ 曲げちゃえ

3時間後

「さて、もうちょっと超能力について説明するっす」

となぜ家にあるのかホワイトボードをひぱってくる

「さて、まず3について説明するっす」

ブラックペンでホワイトボードにでかく3って書く

「3って曲げるって後の数字のこと？」

「そうっす」

そしてホワイトボードに強さと書きその隣に

1, 2, 3, 4, 5

と書いて

「書いたまんまっす」

「数字が高いほど強いと」

「そうっす、だけどこれは同じ能力の中での話っす」

「つまり、曲げるの中で3ぐらいの力と」

「正解でやんす」

ブラックペンをそこらへんに投げる

「後力を使うときは、使う感じをイメージするだけでいいっす」

「イメージね」

すると秀太が立ち上がり

「じゃあちょっと外行くっす」

「なぜ？」

「それはもちろん練習っす」

そう言って部屋から出て行く秀太

「待てよ」

そう言って追いかけるように部屋を出る
靴を踏みつつ外に出ると秀太がもう自転車に乗っていた

「俺走ってきたんだけど」

「じゃあゝ 走っていくす」

やっぱりと言って、俺は走り出す
秀太と平行に走っていると
矢野工場が見えてくる
隣から

「後10分程度でテنز波がきいてくるっす」

「もうそんなに経ったか」

「結構経ったすよ」

「ゲームとかしてたからな」

「・・・てか何で息切れてないんすか」

「まだ3キロ程度だろ」

「・・・そうすっか」

矢野工場

「ここで何やんの？」

「もう力はいええると思うっす」

俺は手をニギニギとやったり足でそこらへん蹴ったりするが何か変わった感じは全くしない

「特に変わってないと思うけど」

するとそこらへんに落ちてゐる鉄パイプを秀太が拾って

「今から殴るっすから、曲がれと思くれっす」

「はい？ て、ええええええ！」

すると有言無言わさず

秀太が腕にむかって鉄パイプを振り落とす

マジ、ってか曲がれ曲がれ曲がれ

と思いつつ目を閉じ腕で払いのけるように鉄パイプに接触する

「とまゝ こんなとこっすね」

秀太の声がしゅっくり目を開ける
すると秀太の手の中に

ストローのように直角に曲がっている

「どうなったの？」

今腕にあたった感覚はしたのだが
なんかアルミ缶を握りつぶす時の感覚に近かった

「栄太が曲げたんすよ」

「マジで」

秀太はじゃあ次と言ってさらに何個か投げつけてくる
よしやと俺は大声をあげそれに応対していく

「疲れた」

と俺は近くにあったドラム缶に座る

「お疲れっす」

やっと練習が終わり周りにはもう真っ暗になっていた

「帰るすよ」

「また 走らないかんの」

「がんばるっす」

きたときと同じ用に走る

「とりあえず、今日分かった事説明するっす」

「おう」

「まず栄太の力は触れてる物のみっす」

「おう」

「触れてるところが曲がるっす」

「おう」

「・・・おうばっかつすね」

「おう」

「もういいっす」

「おう」

「・・・」

秀太の家

「じゃあ明日学校で会うっす」

「じゃあ〜ね〜」

と会話後

俺は家に向かってもうひと走りする

家の前

「あれ誰かいんじゃん」

と俺は走るスピードを落として
歩くのと変わらないスピードになる
家の前に青髪の高校生ぽいのがいた
するとこっちにきずいたかと思うと
手のスケボーを下におろして
それにのりさっていった

「あれ、最初スケボーなんか持ってたか？ まあいいや気味が悪い
奴だな」

と俺は家に入って行った。

秀太モード

家に着いて何個か持ち帰った
鉄パイプを机に置く

「曲がるどころじゃねっす」

と鉄パイプに触る

「曲がる以前にねじれてるっす」

秀太が考えるようなそぶりを見せ
結論を出す

だが頭を振り無いと否定する

「ねじ曲げるって伝説能力の一つっすもんね」

ふうと言つて布団に座り

しかしもしそうならと考える

「ちょっとやばいっすね」

知らない人に着いてくなよ！

月曜日

今俺は自転車の荷台に乗っている
風が涼しく俺の髪を揺らす

「楽だ〜」

「何で私がこがなきゃいけないの」

前に座っている少女が俺に喋りかけてくる

「神聖なる戦いで負けたから文句ゆうな」

「ジャンケンじゃない」

「なはっ」

腹立つ、と言いながらもちきんと
自転車をこぐ立見
ご苦労なっこた

「着いたわよ」

「お疲れ〜」

と言って俺は地面に着地する

「全く普通あんたがこぐのが普通でしょ」

「好きな人を後ろでしょ普通」

なあと言って顔を赤らめる

こいつには、中学2年の夏休みに告白されたのだが
今だに返事はしていない
いまだにこいつは幼馴染としてみているから
答えられない

「さて学校はなんか違うのかな」
「何か言った？」

うおっといつの間に来ていたのか隣に
立見がいる

「いやなんでもない」
「あそ」

皆超能力使いまくってんのかな？
さて、楽しんでいこ

「学校つまらん」

すばらしくつまらん

「期待しすぎっす」

いつの間に来てたのか秀太が隣の席に座る
ちなみに俺の席は一番後ろの廊下側
秀太は前から3番目の窓側だ

「どうせ皆が皆超能力使ってると思ったっすか」

「バリバリ思ってた」

そしたらため息をつき

「そんなわけないっすよ、学校内での能力の使用は原則禁止すっから」

まじかよと言って、机に倒れこむ

「とっとと帰るっす」

「さき帰って」

「何です」

「立見に乗せててもらおう」

そうっすかと言って席を立つ

「じゃあまた明日っす」

じゃあなと頭の上で軽く手を振る
すると背中が思いつき叩かれ
跳ね上がる

「何ですか」

そこには立見がなんか負のオーラを出していた

「また私がこぐの？」

「・・・」

「どうなの？」

「・・・ジャンケンしようか」

やはり風は気持ちがいい
俺の心をさらさらにくれるようだ

「もっと早くできないの」

「これ以上無理よ」

全くジャンケン弱いなゝ

家の前

「ストップ」

と俺の一声で自転車がストップする
今日もいんじゃない
青髪さん

「「あれ誰」」

と、うまいぐわいにハモル

「声かけて来るわ」

と俺はバックを立見に投げつけると地面におりる
そしてその青髪に近ずきながら一言発する

「どちらさんすか」

「・・・」

「ここ俺んちなんですけど」

何にも答えるきないんじゃないの？

「小暮栄太か？」

「そうだけど、何か用」

「お前の能力は何だ？」

「え・・・曲げるっすけど」

え・・・超能力分かったの？ 何で教えてくれなかったの！
と後ろで聞こえるが知らん

「ねじ曲げるの間違いだろ」

長い空白を残して

「一緒じゃないの？」

「ふん、認めるんだな」

「え、うん、まゝ」

すると青髪は俺の目の前でスケボーを作り出す？
何かグニャグニャって出てきた

「明日の午後、矢野工場に来い」

「え？」

「来なかったらこの町がなくなるぞ」

「は？」

「我らガトーに、な」

それだけ言ったかと思うと、ささっとどっかいちゃった

「誰だったの？」

「知らん人」

まとりあえず、

「鞆パス」

はいよと言って俺にバックを投げてくる

明日学校で秀太に聞いてみるか

そのまま家に入る前に立見に

「明日もよろしく」

「何でまた、あんたを乗せていかなきゃいけないのよ」

「好きだぜ」

当然幼馴染として

立見は顔を赤くして何か言っていたが面倒なので
とつと家に入っていく

「さて、知らない人について行くべきか行かざるべきか」

政府って裏多いよね！
(前書き)

すみません
かなり短いです。

政府って裏多いよね！

学校

「何の用っすか？」

今は、2時間目の休憩時である
俺は秀太と一緒に屋上に来ていた

「実は昨日変な奴が家に来ててさ」

「変な奴っすか？」

「青髪の」

「でどうしろってゆうんっすか」

「調べて貰おうかと」

「そんだけじゃ無理っす」

まさりゃそうかと俺は考え込んだ後
思い出して一言

「ガトーって言ってた」

すると秀太の顔が難しい顔になり

「聞いたことあるっすね」

と言って何で入っていたのかノートパソコンをポッケから出す

「調べてみるっす」

俺は秀太のパソコンを覗くと

パソコンの画面に

なんか良く分からん文字がカタカタと出てくる

「出ったす」

「どれどれ」

と言ってパソコンを見る

そこには政府のデータベースの中で

色々な情報があり

組織一覧の中に

ガトーと言う組織があった

しかし何をする組織か書いて無くて

ただ単に組織のメンバーの写真が乗っていた

「画像ひらいていくっすから、そいつがいたら言うっす」

「てか、政府のデータベースはいいの？」

「犯罪っすけどいつものことっすよ」

「あ・・・そう」

するとどんどん画像を開いていく

見たことが無い人ばかりだったがもうそろそろチャイムなる
ってところであの青髪の画像が出てくる

「こいつだ！」

「はいっす」

すると画像の隣の資料を読んで俺たちは驚く

「性別女」

「16歳」

「A型」

「超能力 創設0」

「あれ女!!」

「創設0っすか!」

俺と秀太が同時に言葉に発するが
違うことに驚く

「何創設0って何?」

「簡単に言うっす」

「おう」

「0ってのは今のところその人間以外その能力持っていないって事っ
す」

「キンーコンーカンーコンー」

やばって言って秀太はパソコンをしまうと

「とりあえず、そいつにはかかわらないほうが良いっす」

「・・・おう」

「・・・」

「どうしたの？ 珍しく静かじゃない」

「・・・」

「無視はやめなさいよね」

「お前超能力何？」

自転車がぐらっと揺れる

「何ボケてんのよ！」

「いや確認だよ」

「反射5よ」

全くと言って何も喋らなくなる

『流石に巻き込めないよね』

家の前

「じゃ〜ね〜」

「うるさいわね」

さて、行くかな！

「ケンカにならなきゃ良いけど」

拳銃って卑怯じゃない？

矢野工場

「さてさてどこにいらっしゃるのかな？」

俺は工場に着いて自転車を止める
時間かかりすぎちゃった

「外はいないみたいだし中かな？」

と言って俺は中に入っていく

「来たか」

奥から声が聞こえる
しかし姿は確認できない

「姿ぐらい見せても良いんじゃない」
「お前しだいだな」

あそうと言って俺は壁にもたれかかる

「で、なんの話かな？」
「簡単な話だ、我らがトーの仲間に入ってもらおう」
「何で俺が！」

俺は声を荒げる

「我らガトーはお前と一緒にの人間が集まっている」
「どうゆうことだ？」

するといつの間にいたのか今は使われていない
ガラクタの上に青髪がいた

「お前こっちの人間じゃないだろ」
「そうゆう事」

俺は青髪に向かって歩く

「ガトーって集団もこっちの人間じゃないって事？」
「そうゆうことだ」

青髪はガラクタの上に乗ると

「だが皆お前と来た世界が同じとは限らない」
「どうゆう事？」
「パラレルワールドと言ったな」

青髪はガラクタの上に座り

「パラレルワールドは無限にある」
「ああ」

「各パラレルワールドからこの世界に集まりつつある」
「何が？」

「人間だよ」
「つまりどうゆうことだ」

「他のパラレルからこの世界のために人間が集まってる」
「ほゝ」

「そのことを察した俺たちはガトーを作った」

すると青髪は俺の前に飛び降りてきて

「強いよ、俺らは各パラレルから来たって事は俺の世界じゃ不可能でもあっちだと可能だ、つまり死角が無い」

「で俺にもガトーに入れて事か」

「そうゆうこと」

俺はため息をつき

身をひるがえし

俺は出口に向かって歩き出す

「回答を聞いてないぞ」

俺は振り返りもしないで答える

「興味ないよ」

何だと、と言って青髪はこっちに向かってくる
しかし俺は近くにあった柱をねじ曲げる
すると上に置いてあった機械が落ちてくる

「あぶね」

後ろで声が聞こえる

外に出て俺は自分の自転車に向かう

「おい」

「しつこいな」

俺は後ろを振り向く

「てめゝはぜったい殺す」

と言って青髪の手に異様に長い剣が出てくる
怖いなゝ

「物騒だな」

うるさいと言って青髪は俺に向かって
左手に作った短剣を投げてくる

「何それ、なんでも作れるのすげゝ」

と言いながら俺は飛んできた短剣を近くの鉄パイプで落とす
すると青髪がこっちに走ってきて剣を振り落とす
俺は鉄パイプで迎え撃つ

「こんなことやったこと無いって怖ゝ」

「仲間に入れ」

「興味ないって」

と言って俺は鉄パイプごと剣をねじ曲げる
すぐにバックステップで距離をとり落ちてる鉄パイプを拾う
青髪は使えない剣を投げ捨て新しく左手に剣を作る
右手に拳銃を作ってこっちに発砲する

「無理無理無理無理、どうしろってゆうんだよあんなの」

と言いながら近くの機械の後ろに隠れる
何か無いかと探していると機械に銅が使われていたため
銅の周りをねじ曲げて銅だけとって
それを盾にして青髪に突っ込む

「ズダーン」

と音が聞こえ銅が変形する

そのまま銅を青髪に押し付け

青髪の体に合うように銅を曲げる

「h v あ v p」

銅に包まれてるため何を言ってるか分からない

「お疲れ」

と言って俺は、もう一度自転車に向かう

自転車に着いたら

後ろから

「ドカーン」

「何だよ？」

つい大声を出してしまつて振り向く

「もう容赦しないからな」

「やっぱあんなんじゃだめか」

やってやろうじゃん

最後まで

透明って色なのかな？

立見モード

「今日何か栄太の様子がおかしかったのよね」

今私は電話している相手は秀太だ

「おかしかったってどこらへんがっすか」

「妙に静かだったのよね」

「それだけでっすか？」

「後は」

「まだあるんっすか」

「幼馴染の勘」

「・・・」

「・・・」

電話の奥からため息が聞こえ

「栄太に何か変な事無かったっすか」

「え・・・特に思い当たる節なんて無いけど」

「じゃあ玄関開けるっす」

「え？」

「ピンポーン」

すると電話が切れる

そうゆう事で言うてから玄関の鍵を開けにいく
扉を開けたらよく見る奴が出てくる

「いきなり失礼」

「いや別にいいけど」

そうしたら突然秀太が黙る

「どうしたの中入りなさいよ」

そうしたら秀太の顔が青ざめたと思ったら

「栄太が危険っす」

「え？　なんで」

「メモリージャックしたっす」

「また勝手に《怒》」

「昨日青髪に会ったっすね」

「ええ　会ったけど」

「場所は矢野工場っすね」

そう言って秀太が私の肩をつかみ

「自転車借すっす」

「何で？」

「いいから早くするっす」

「う　うん」

栄太モード

俺は今また工場の中に戻っていた

「とんでもないよあんなに使うなんて」

と独り言を言っている

入り口から青髪が入ってくる

「どこ隠れやがった」

と言って青髪が手の平を上に出し

真っ黒の箱のようなものが出てくる

「またあれかよ」

と言って俺は音を立てないよに後ろに移動する

すると予想以上に工場中が静かなため

音が響いてしまう

「くそ」

って言って他の機械に向かって飛ぶ
そのままローリングで機械の後ろに隠れると
さっきまでいた場所に

黒い箱が周りの機械など関係なく貫通してくる

「あつぶね」

と言って少し移動すると目の前に黒い箱が現れる

「マジか！」

俺は後ろの窓のふちに人差し指を当てて
ねじ曲げるそのままふちを指でなぞる
すると窓のふちが指を避けるように

曲がり左手で真ん中を叩くと、うまいぐわいに
外にガラスが落ちる
そこの窓から外に脱出する

「何とかしないとあの黒い箱はやばいって」

と言って外に出て走る

で壁に隠れると座って考える

どうすればあの黒い箱を何とかできるか

ねじ曲げる　ねじ曲げる

そしてはっとする

「周りの空間をねじ曲げることができれば」

まず右手の触れている空間をねじ曲げる

そしたら右手がだんだんぼやけてくる

「これ以上はやばそうだな」

と言って俺は近くのでかい石に触る
すると

でっかい石が吹っ飛び自分でびっくりする
そのまま右手のまどっていた何かを解いてしまう

「何今の？」

て言った瞬間

「そこか！」

と聞こえ右隣を黒い箱が貫通していく

「やってみるかな」

と両手の空間を曲げそのまま
青髪の前に出る

「諦めたのか、それとも仲間に入る気になったか」

それを言い終わったと同時に
俺は青髪に向かう

「どっちでもねーよ」

「そうか」

と言って俺に向かって黒い箱を

俺に打ってくる

いや手から打ち出される
それを手で触れると

「パキュン」

と言って真横に飛んでいく
予想してないところ飛んでいくのかよ
ま　とりあえず勝てる
そのまま青髪に向かって走っていくと

「パン」

と音がするが何にも見えない
何だと思っていると

「バツシュ」

左腹に痛みを感じるその痛みによって
バランスを崩して倒れる

「何やった？」

と青髪に聞く

「この黒い箱色変えられるだよ」

そう言って右手に黒い箱出し
その黒い箱が消えていく

「透明って事か」

「ご名答」

俺は舌打ちした後

意識が薄れていく

最後に立っていた青髪が

右に傾いたところで意識は途絶えた。

透明って色なのかな？（後書き）

お久しぶりです

また後書きでお会いしましたね

この作品を読んでいただきありがとうございます
すいません

これから事情により

土曜日か日曜日更新になります

これからもよろしく願います
感想お待ちしております。

それでは、また後書きでお会いしましょう

怪我した後の傷ってなんかいやじゃない？

まぶしい光が目に入ってくる
その光の中に暗い影が映る

「おきたっすか」

そう言って陰は光から映らなくなる
俺は右手で起き上がろうとする
しかし体の左側に激痛が走って
右腕が元の位置に戻る

「無理っすよ動けるはずないっすから」

俺は顔だけ声の方に向ける
隣に良く見る顔がある

「ここは？」

「俺の家っす」

どうなっているのだろうか
青髪はどうなったのか
痛みつけるだけで
殺すつもりは最初からなかったのかもしれない

「全く何やってんすか、関わるなって言っただはっすよ」
「わりい」

全くと言って秀太はパソコンを開く

「鳴田なりたとやったんすか」

「鳴田？」

「青髪っす」

ああと俺は肯定する

「よく生きてたっすね」

「俺はどうやって助けられたんだ？」

「私に決まってるっす」

？ だったら青髪とやった事を聞く必要がない
俺が倒れた後にもまだ青髪はいたはずだ
すぐどこか行ったのか

「青髪と会わなかったのか？」

「すれ違ったっす」

「は？」

「左肩に風穴開いてたっす全く栄太は悪魔っすか」

俺は覚えている記憶を思い出す
確かあいつには一発の攻撃も入ってなかったはずだ

「俺はやってねーぞ」

すると秀太が驚いたように

「じゃあ他に誰かいたっすか？」

また思い出すがそんな奴はいなかった

「いや誰もいなかったけど」

「不気味っすね」

と言って秀太は菓子ポケットから出す

何かくうっすかと言われ左手で飴を食べようとするが
少し動かしただけで激痛がまた走る

「っつ！」

そんな様子を見たからなのか飴を俺の口に突っ込む

「むぐう！」

「大人しくしてないと血止まったばっかつすから」

本当に全く動けないどこかを動かそうとすれば
激痛が走る

「とりあえずガトーの情報をリストアップしといたっすから」

といってこっちに画面を向ける
ちよっと見にくい

「ガトーの中にもランキングがあるっす」

「青髪は？」

半ば投げやりで質問する

「13位っす」

「あれがかよ」

全身から力が抜ける

「後ガトーのメンバー数は79人すね」

「あっそう」

どうでも良いので聞き流す

「ガトーは政府が全力で追ってるみたいすね」

「政府が作ったんじゃないのか？」

「違うみたいす」

そうと言ってこれからどうするか考える？

青髪を敵に回した以上ガトー全員が襲ってくるのだろう

「悪いなこんなことになっちまって」

「気にしないっす」

ついでに俺が思っていた事を口にする

「何で病院連れて行ってくれないんだ？」

40分前

鳴田モード

「ご名答」

と言った後に前に横たわるガキのまぶたが落ちていく
用はなくなったと俺は目の前のガキに打つために

「HB」を作り出す

手に黒い箱のようなものが創設される
打とうとすると突然目の前がゆれる
そのまま横に吹っ飛ぶ

「つってな！ 誰だよ？」

「暴れすぎお前」

工場の上に足をぶらぶらしたまま見下すように
人がいる

サングラスをかけピンクの服を着ている

髪が黒

目が黒

でピンク合うはずがない

「パラレルから来て力手に入れてちよっと調子乗ってただけだろう
し」

と言ってそいつはガキを指差す

「つか、てめがなんでいんだよ」

「居たらだめなのかな？」

「他のミッションはどうなった!？」

「終わったよとっくに」

「何だとじゃあ仲間に入ったのか？」

「まゝな」

腹が立つ野郎だ

大体能力を使って俺を吹っ飛ばすってなんだよ

「何のようだ？」

「いやからかうなら鳴田かなって思って」

頭の中でぷちんって音がする

「死ね！ くそが」

「短気だな」

俺は「HB」を創り発射する

しかしそいつに届く前に消滅する

「くそが、だてにガトー5位じゃないってか」

「まーね」

こいつの能力は
執筆^{ししゅうびつ}

書いたことが本当になる

リアル系とノンリアル系が混ざった
チェーン系だ

「それじゃ俺もう帰るから」

「とっとと帰れ」

「そうそうそいついじめたらだめだよ」

「お前には関係ない！」

んゝと困った顔を見ると執筆を使う能力者こと
たなかゆうき

田中祐樹は

じゃあと言って下に飛び降り着地する

すると空中に光る文字を書き出す

それを俺が読み出す前に能力が発動する

何かが青髪の左肩に貫通する

「っが！」

「混乱するようにパニック弾打つといたんで早く帰ってきてくださいね」

と言ってまた何かを空中に書くと何か分からない機械が現れる

全く音がしない

なんの音もせず機械が空を飛ぶ

その上に祐樹はのり飛び去る

「k ヴ い b」

俺はくそがと言ったのだから言葉にならない

早く帰らなければ歩けなくなってしまう

と考えるのも精一杯だ

仕方なく帰り道に着く

歩いている途中でリングを両手につけまくってる奴とすれ違う

すれ違った奴ににらまれた

本来なら瀕死になるまで殴るのだが

それどころではない

「k l g い c v v w p ろ k」

マジ腹立つなあのスカシタやろうと言ったのだがこんな言葉になつてしまう

畜生と心で思う

今日は最悪な日だと路地裏に入りそこに倒れこむ

俺の前に誰かが降り立ったが確認できない

「ggg1えc」

誰だ？と言って無理やり仰向けになる
顔を確認した

人々モード

人々が行きかう町のビルの上に一人の男が立っていた

「面白くなってきたな！」

そいつはそう発した後、目を閉じる

「次は晴太^{はれた}が動くのか！」

と言って目を開ける

「10位に殺されるのかな新入り赤ちゃんは！」

ふっと言って男は笑っていたただ単に笑っていた。

10位と11位の交錯っす

栄太モード

本を読む事にも飽きてきた

秀太の家から病院に移ってからもう1週間立つ
ずっと本ばっか読んでる

俺は本を隣の子供から借りた本を返す

「暇だ」

何にもやることない

誰か来いよ

まゝまだ学校だよな

今の時間は1..25

誰もくることないし暇だ

「先輩暇なんですな」

隣の子供が喋りかけてくる

「お前と喋るほど暇じゃねーよ」

「ひどいです」

この子供は茶髪で中2で名前は伊藤仲居いとうなかいである

こいつとは何か妙にやりづらい

あっちの世界で車に引かれそうなところ

助けてから妙にくつついてくる

「何でお前が入院してんだよ」

「車に引かれました」

あのととき助けた意味はあったのだろうか？
本当に考えてしまう

「寝る」

と言って俺は布団に顔をうずめる

「おやすみなさい」

俺は返事することなく夢の世界に落ちる

「こんにちは！」

と声が聞こえ布団の中で目を覚ます

「誰だ」

すると声が近くなる椅子にでもすわったのだろうか

「あなたはまだ知らないと思いますが」

「何じゃそりゃ」

相変わらず布団の中にうずくまっている俺は
自分の声がうるさい

「ガトーのものです」

俺はいきよいよく布団をフトツ飛ばす
隣に帽子を深くかぶり服が真っ赤の男が座っていた

「何のようだ！」

大声をあげながら俺は真剣な顔になる

「鳴田がこの間は迷惑をおかけしました」

「殺しに来たのか？」

「とんでもないまだ殺せませんよ」

「じゃあ何しに来た？」

「殺しに来たんですよ」

「は？」

「しかし弱ったあなたを殺すのは張り合いがない、だから今はまだ
殺さないのです」

「なるほど」

俺は吹っ飛ばした布団を手に取りもとの位置に戻る

「質問していいか？」

「何でしょう？」

「何で俺を殺そうとする？ 誘いを断っただけだろう」

「ナイターの戦力にならないようにですよ」

「ナイター？」

それではと言ってその男は椅子から立つ

「おっと自己紹介がまだでした、私は古内晴太こないはれたですよろしく」

と言って出歩いていった

「ナイター、ガトー、政府、か」

立見モード

今家に向かって帰っている
自転車をこぎながら考えていた
栄太が何かに巻き込まれている

秀太が家に来てからもう一週間立つ

学校では怪我して休みとなっているが

病院が分からない

近くの病院にも行ったのだが

居なかった

別の病院のためどこに居るのか分からない

秀太に何回も聞くが全く答えてくれない

「は」

ため息をつく

家に帰ろうと思っていたがそんな気分じゃなくなり

別の道に行く

商店街で色々買っていたらいつの間にか暗くなっていた
そろそろ帰るかな

と思っていたと

路地裏で声が聞こえる

「・・・あのガキ・・・青髪を向かわせたのがだめだった・・・」

「何だろ？」

と興味を持ち

路地裏が見える位置に移動する

「全く何で次は晴太なんだよ」

「しらねーよ」

髪がドピンクの男と

肩に11と書いてあるバッチをつけた男が喋っている
ドピンクがいきなり立つ

「俺帰るから」

と言って壁に向かって歩く
壁にぶつかったと思うと
ドピンクが消えていた

「自分勝手な！6位だからってよ」

どうせ自分は11位ですよーといいながらバッチ男がこっちに向か
ってくる

私は能力を使いまわりの色を反射する
すると見えなくなる

「全く、めんどくせーこれ俺の仕事かよー」

とバッチが隣を過ぎようとしたときに発する
するとバッチの手が首をつかんでくる

「何・・・で・・・分か・たの」

「ガトーなめんじゃねー」

何だろうガトーって？

そんなこと考えている間に
意識がだんだん薄れていく

「どう始末しようかな？」

バッチはそのまま無表情のまま言った。

羊の皮ってかぶっても暖かいだけだよね！

晴太モード

「もしもし」

「よくよく」

「うるさいですね」

「何何何？ 何のよう？」

「定期報告です」

「そうそうそう そうだった」

「とりあえずナイトーと栄太さんの接触はないようです」

「了了了 了解」

「とりあえず始末は後でとゆうことで」

「じゃじゃじゃ じゃあよろしく」

携帯の連絡が切れる

「ちゃんと自覚持ってくださいよ2位なんですから」

屋上に居る、晴太はため息が出る

「全く何であんな人が2位なんでしょうか？」

晴太の背中を預けていた扉が開く

「おっと危ない」

と言って前に出る、すると扉からさっきの子供が出てくる
しかしさっきとは服が違い夜の遊び人みたいな格好をしている

そう、パジャマのような青色から胸元は全開でズボンにチェーンが
8つ

上が黄色で手に自作感たっぷりのバック
とゆう格好になっている

「何やってるのですか？」

「あんた誰？」

「分かってますよ、6位」

そう言うと相手はキョトンとした顔になり
その顔のまま言う

「なぜ気づいた？」

「さっき部屋にバックなどどこにもありませんでしたから」

「なるほど、やはり 相^{そうじ}似は使い勝手が悪い」

「かなりいい使い方だと思えますが」

「ばれては意味がない」

と言って近くにあったベンチに座る
私は扉を閉めて言う

「何故ここに？」

「2位からのミッションだ」

なぜあの人が？ 信用していないのだろうか？

私はミッションはこなしますよ

たとえ相手が新米のルーキーでもね

未だにあの人の頭の中は分かりません

「どのようなミッションで？」

「青髪の始末だ」

私は困惑の顔をする

そんなことになるほど青髪がミスしたはずはない

ミスと言えど栄太の引き込みのほず

確かに殺そうとしたのは悪い

普通は味方にならなくても

2位の力を使えばよい何故始末を？

「青髪は何を？」

すると前に居るガキ

・・・いや羊の皮をかぶった狼が

羊の皮をはいでいく

顔が6位と名乗るものの顔になり

髪の色がドピンクに変わる

「人核じんかくに拾われやがった」

丸裸になったオーラからは

私が指を動かすこともさせなかった

・・・この人の言動のオーラの感じは未だに慣れませんね

いや、しかし何故人核が今動くのでしょうか？

「人核、今どこに居るのでしょうか？」

狼は視線を下に向けて言う

「あいつはこっちからは、絶対に見つけられない」

そう言ってまた私の目を見る

その目には獲物を駆る前の狼のものではない
目の前で獲物を横取りされたときのそんな目
そして目を上に向け言う

「この会話も聞いてるんだろう 人核！」

・
・
・

「青髪がここに居るのですか？」

「そうらしいな」

なるほど これはちよつと大変なことになりそうですね

人核モード

「ふん、何が聞いているんだろう 人核だ」

そう言って手に持っている手帳にメモを取る
34時間後、晴太と赤ん坊
とそれだけ書く

「さて、青髪にはしばらく勝手に動いてもらっても大丈夫だが」
そう言ってポッケに手帳をしまう

「反射5の実力も見ないとだめだな」

と言うと人核は 笑う 笑う・・・笑う

立見モード

手に血がついている
しかし自分の血ではない
あくまでも他人の血
見知らぬ人の血

暖かい血

さっきまで血管に守られていた血
生きていた人の血

目の前には人が倒れている

バッチの着いた服

さっきまで自分の首を絞めていた人

「何で？ 私何もしてない」

そう言うが前のバッチは動かない

勝手に倒れた

腹から血が流れている

通りかかった人はこう言うだろう

『人殺し』

と

それほどまでに状況は動いていた

前に動かない人

手に他人の血を着けた人

目に見えてる

誰かに言っても信じてはもらえない

「やだ やだやだ やだやだやだやだやだやだやだやだやだ」

牢屋なんか行きたくない、

皆に会えなくなる

逃げなきゃ

ばれないように逃げなきゃ

そういう結論にたどり着き走り出す

誰にも見えないように手を隠しながら
しかし路地裏から出るってところで後ろから
誰もいないはずの場所から声が聞こえる

「もう楽しんだかなこの状況は!!」

足を止めゆっくり振り返る

振り向くのが怖かったが

振り向くことをとめることができない

振り向きをえると

腹に激痛が走る

しかもさっきと違い地面がすぐ近くにある

顔を上げると前に、いや路地裏の出入り口に
バッチがいた。

気になったら寝れない！

栄太モード

「ないっすね」

「そうか」

俺はさっき来た秀太にナイターの事を聞いてみる
しかしどこのサイトをジャックしてもナイターのことだけは全く出
てこない

「で、どうするんすっか？」

「何が？」

「ガトーの事に決まってるっすよ」

俺は手で遊んでいたゲーム機の電源を切る

「どうするも何も、あっちから殺しにくる分けだからな」

「全く何をどうやったら、こんな組織に狙われるんっすか」

知らんっと言って俺は秀太が持ってきたミカンを食べる

「あ、そういえば栄太の部屋に入る前になんかケンカぱいのやって
たっすよ」

「それより、知りたい事があるんだけど！」

野荒狼似モードのいろうろうじ

「全く、どこにいるんだ鳴田」

病院の廊下を歩いていると人とすれ違うたびにこっちを振り向く

「髪がピンク色っているんだな」

とか何とか聞こえるが、気にははいられない
この病院内にいる事は分かっているんだが、詳しくの場所はまだ分からない

しばらく歩いていると、また同じように何人もが振り向いて驚いているが

一人だけ違う反応を見せた

「青の次はピンクかよ」

俺は振り向きそいつの喉元に手を突っ込む

「青色の髪の子を見たのか？」

喋れないのか首を縦に振る

俺はそいつの喉元から手を引くと

男は言った

「霊安室の前にいたけど」

なるほど

と言って俺は霊安室に足を向ける

鳴田モード

霊安室から流れてくる異様な空気を感じながら霊安室の扉を開けようとしたり閉ようとしている

この霊安室には人核が殺した人間がいるんだが入る気にならないしかしどのような攻撃をしたりするのは気になる

かといって何かグチョグチョの何かがあるような気がしてならない

「久しぶりだな、鳴田」

「なあ！」

と言って俺は振り返るしかしそこには俺がいた
一瞬戸惑うが理解するのも早かった

「狼似か、俺の事もうバレたの？」

「当たり前だ」

ひどいな全く少しぐらいはのんびりさせてくれてもいいじゃないか

「お前はもうガトーの一員などではない、ただのクズだ」

「それはひどくないか？」

そう言っただけに俺は、ビー玉を手の中に大量に創設する
そのまま狼似に向かって飛ばす

「ゆるい」

と言って狼似の手からも同じようにビー玉を飛ばして
全部打ち落とす

「相似やろうが」

「似ている事が何か悪い事か？」

普通に殺り合ったら殺されるよな

巻き込まれてしまった!

「何故お前は、人核などに着いたんだ?」

「好きで着いてんじゃないんだよ」

と言って鳴田は自分の周りに槍を出現させる

「これだけ受け切れるのか なあつと」

そう言って狼似に向かって槍を発射する

しかし狼似は顔を変えずに一言

「似て比になるもの」

それだけ言うと、俺と同じ槍、いや俺のよりかなりデカイ槍が飛んでくる

質量によって、俺の槍が勝てるはずも無くむなしく打ち碎かれる

勝った狼似の槍はそのまま俺に向かって飛んでくる
それを紙一重で交わす

「俺が理解できるものは、似せる事ができさらに比率を変えることができる、自分が原理を理解している創設とでは相性が悪いんだよ」

「だから、お前が俺を殺しにきたんだろ」

「その通りだ」

俺は地面から天井まで届く壁を創設する

そのまま近くにある階段で上に上がっていく

狼似は自分でそこまでの力を使う事はできない

だったら壁を作って逃げるしかない
壁を似せられても意味ないしな

何回も階段を上っていくしかしこのまま逃げても意味が無い
どうせ狼似の事だ死ぬまで追ってくるだろう
だったらちよつとあいつに手伝ってもらうとするか

人核モード

「おいおい、それはいただけじゃないな」

流石に俺のルールを破るんだったらこっちからも始末するしかない
なるんだけど
ちよつと様子見

栄太モード

「一位の名前画像はわかんなかったすけど、二位のは名前だけ分かったす」

「何て名前？」

「菜始龍也なしりゅうやって名前す」

ふうんと俺は言ってから、また布団にもぐりこむ
ちよっと考え事をしているとこの部屋の扉から
思いつきり扉を開けた音が聞こえる

「クソやろ！ てめーに手伝ってもらいたい！」

と声が聞こえたので布団から顔を出すと
そこには俺を病院送りにしたあの青髪こと鳴田が立っていた

「何でてめーがここにいる」

「話は後だ、狼似が追ってくる！」

「誰だそれ！」

鳴田は俺の話も聞かずに俺の腕を掴んで窓から飛び降りようとする

「待てここ7階」

「知らん」

と言って飛び降りた

しばらく空を飛んだ後に、鳴田の背中に翼が生える
かっこいいー
ちよっと目を輝かせてしまった

地面におりたった後に鳴田が言う

「とりあえず、今だけ手伝ってくれ」

「嫌だ」

「そこを何とか」

「嫌」

「ガキか！」

「はあ」

としばらく言い争っている

鳴田の顔に焦りが見える、しかもそれは俺の後ろに向いていた俺が振り返るとそこには髪がドピンクの男がいた

「やっべ、狼似にもうおいつかれたよ、とりあえず頑張って」

と言って鳴田は走って行ってしまった

「マジ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1637j/>

パラレルワールドで超能力

2010年10月9日23時26分発行